

が適応し生きていくために考え計画していく活動である。この魂の作用は、肝の働きと符号している。和田東郭は、「凡そ、万事成し遂げるは、皆これ肝氣に因^よって成るなり」と述べているが、これはこの肝の働きを総括したものだといえる。

このように、肝の働きは、西洋医学とは非常に異なるものであり、混同しないように注意すべきであろう。

II. 肝の病態

疎泄と蔵血の失調、つまり気と血の病変が肝の病態となる。その特徴は次の3つである。

①**疎泄作用失調**：気の病態では、疎泄作用が失調したために気がめぐらず気滞となることが多い。さらに上半身の症状や火や熱の症状、熱のために風が吹いたような症状（めまい・痙攣など）が出現する。

②**蔵血作用失調**：血の病態では、蔵血作用の失調のために、肝血不足による血虚が生じやすい。

③**精神症状**：精神的ストレスのために精神症状が伴いやすくなる。これは社会との不適應症状ともいえ、気滞症状がよく出現する。

肝の気の病変は気滞という実証を、肝の血の病変は血虚という虚証を招きやすいのがその特徴となる。これを、「肝氣は常に有余、肝血は常に不足」と言い習わしている。有余[↑]とは余分なものが存在する、抱え込み余るなど意味で、気滞・炎上・風様症状などの気の実証の病症が多く出現し存在しやすいことである。

他臓腑との関係では、肝はさまざまな臓腑に影響を及ぼすが、特に脾胃の機能に影響しやすい（臓腑合併病態参照）。また肝陰虚は、腎に影響を及ぼし、腎陰虚の合併証（肝腎陰虚証）が出現しやすくなる。これは、肝と腎が全身の陰分（滋養分）をコントロールする重要な臓腑だからである。さらに肺にも影響してくる。

図 1-12 肝の病証の特徴



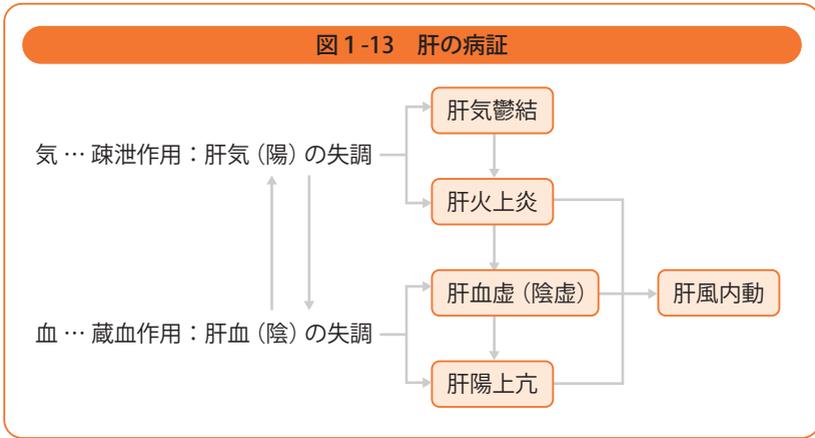
1 気の病症 —— 実証

肝気鬱結

肝気鬱結は、肝の疎泄作用の失調により気の流れが滞って気滞となったものである。次の2つの状態がある。なお気滞の詳細は本シリーズ第2巻の気滞の病症の項(206頁)を参照されたい。

①**気の力の低下**：エンジン出力が落ちて、ノロノロ動く自動車のように、気をめぐらす力が弱くなり停滞した状態。抑うつ的となり脹満感や症状の移動などの気滞症状が出現する。

②**気の力は保持**：渋滞した自動車のように、気をめぐらす力は弱くないのに停滞してしまい、結果として気が強くなり過ぎた状態。気が高まったり、みだりにめぐったりする状態だといえる。気は本来、陽性の性質があり、停滞すると上昇したり熱を帯びてくる。そのため、焦燥感・興奮・頭痛・顔面紅潮などの熱証症状や上部症状が出現する。



②は実証症状であり、また精神的ストレスで誘発されたり悪化するようになり、精神的ストレスと関連することが多い。ただ本症は、精神症状そのものではないことに注意が必要である。あくまで精神的ストレスは、よくみられる本症の原因の1つであり、本症はその結果出現した単なる病態表現である（51頁の **POINT** を参照）。

症状：①気滞症状：脹満感・痞塞感・疼痛（移動性や軽快増悪を繰り返すものが多い）・梅核気（咽喉頭異常感症）など。左右季肋部に多くみられるが、胸部・乳房・下腹部などにもよく出現する。

②精神症状：焦燥感・イライラ感・怒りやすいなどの興奮症状やため息・抑うつ感・無気力感などの抑うつの症状など。これらは精神的ストレス状態で誘発されたり悪化することも多い。

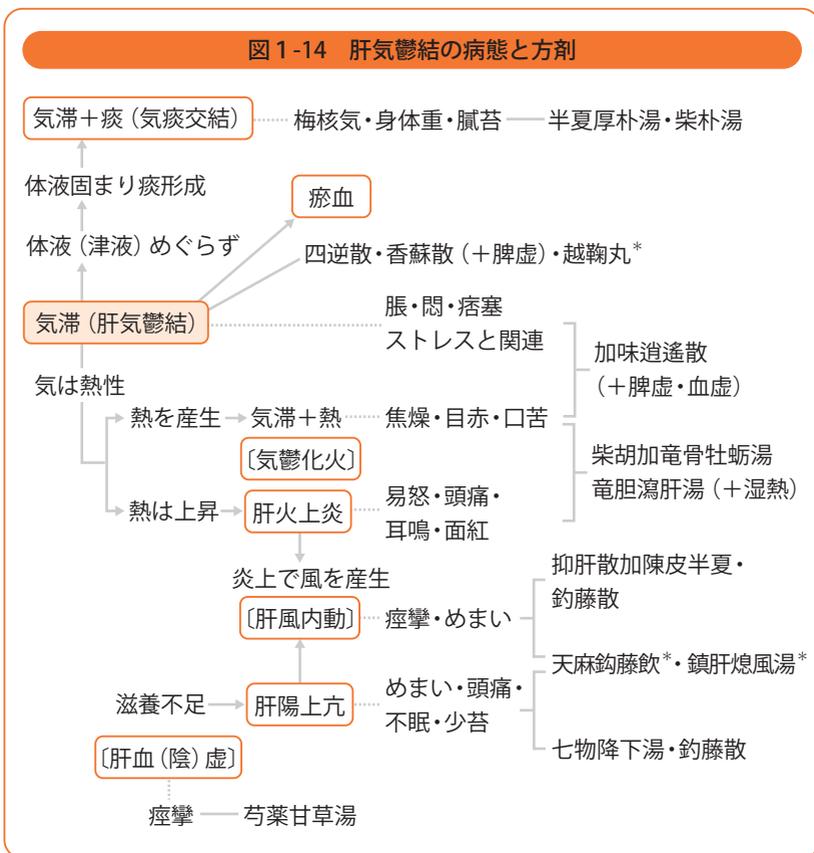
③月経症状：遅発月経・過少月経・月経前痛・月経前の乳房脹満感（痛）や精神症状（焦燥感・イライラ感・易怒など）。

④胃腸症状：脾胃疾患と合併しやすく、噯気・悪心嘔吐・腹痛下痢などがみられる。

⑤その他：熱に変化しやすく、瘀血や痰飲を生じやすい。

⑥脈：弦脈が多くみられる。

図1-14 肝気鬱結の病態と方剤



治法：気のみぐりを調整する（理気[†]）。代表方剤は四逆散。脹満痛や嘔気など強い気滞があるときには柴胡疏肝湯*（四逆散合香蘇散で代用）が使用される。その他に合併病態などに応じて種々の方剤が使用される。すなわち、胸部痞塞感・食欲不振・めまい・月経不順など気滞+血虚+脾虚があるときには加味逍遙散，ほてり・動悸・焦燥感など気滞+熱+脾虚があるときには柴胡加竜骨牡蛎湯，ゲップ（嘔気）・胃もたれなど脾虚と軽度な気滞には香蘇散，咽頭痞塞感など気滞+痰飲には半

夏厚朴湯，緊張興奮・手指震顫など気滞＋肝風には抑肝散あるいは抑肝散加陳皮半夏などが使用される。

肝火上炎

肝鬱化火ともいう。肝気鬱結の長期化や重症化により，停滞し鬱した気が熱に変化し，燃え上がった病態（氣化上炎）である。これは気は本来熱性であり，停滞すると熱が生じるためである。本証は，急激な血圧の上昇時に付随した自覚症状を思い浮かべると理解しやすい。

症状：熱が上昇したための上部（顔面・頭部など）の実証の熱症状（実熱証）が特徴となる。

①**上部熱症状**：熱が頭部に上昇し，熱感を伴う腸満痛などの頭痛・顔面紅潮・眼瞼結膜充血（目赤）・めまい・耳鳴・口苦などが出現する。他の熱症状を伴うことも多い。めまいや耳鳴は急性であることが多く，海鳴りのような耳鳴が多い。

②**気滞による熱（氣鬱化熱）症状**：熱性気滞による季肋部の疼痛（熱痛），気滞が亢進したためのイライラ感・焦燥感・怒りっぽいなどの精神症状，熱が心神をおびやかしたため不眠多夢などが出現する。

③**熱症状**：口苦・便秘・褐色尿・熱のための吐血や鼻出血，さらに過多月経などの出血症状が出現する。便秘や褐色尿は熱で津液が消耗されたためである。

④**舌脈**：紅舌・黄色苔（粗い感・膩苔など）・弦数脈。

治法：上昇した肝火を冷まし降ろす（清熱瀉火）。頭痛・のぼせ・耳鳴・褐色尿などにはツムラ社製の竜胆瀉肝湯がよく使用される【注1】。嘈雜感[†]・呑酸・ゲップ（噯気）などには左金丸*が使用される。その他に，動悸・不眠・のぼせ・精神不安などには柴胡加竜骨牡蛎湯や柴胡清肝湯【注2】なども使用される。熱証が強いときには，黄連解毒湯を加方する。

注1 竜胆瀉肝湯には、ツムラ社製と小太郎漢方製薬製の2種類がある。両剤は構成生薬が異なり、小太郎漢方製薬製の竜胆瀉肝湯は一貫堂医学の解毒症の体質改善薬なので注意が必要である。

注2 柴胡清肝湯は、わが国の一貫堂医学の小児解毒証体質のいわゆる体質改善薬としてもよく使用される。

2 血の病症——虚証

肝血虚

肝血の貯蔵が不足となった血虚証の状態。脾胃機能低下や先天的虚弱などによる血の生成不良、過多月経などの出血、慢性消耗性疾患などによる血の消耗などが原因となる。重症化したものを**肝陰虚**とよぶ。**腎陰虚**と同時にみられることも多い（肝腎の合併症を参照）。

症状：全身的な血虚や陰虚の症状が起こる。特に頭部・眼目・爪・筋肉 **POINT 2**（58頁）などの症状がよくみられる。

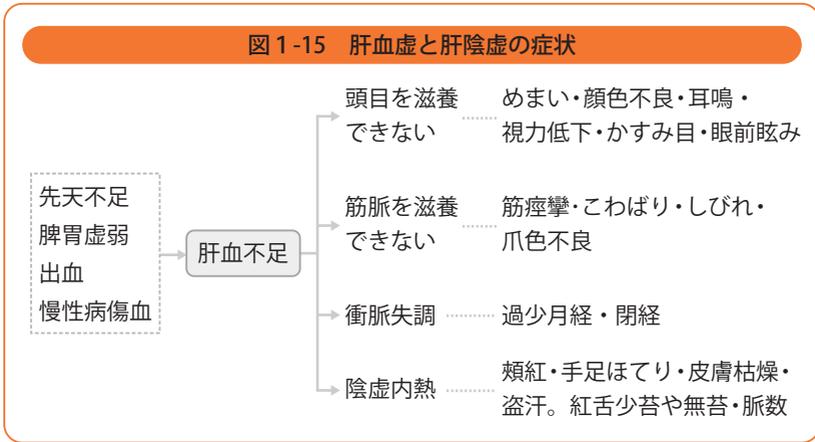
①**滋養不足症状**：顔色不良・めまい・立ちくらみ・疲れ目やかすみ目（眼花[†]）・眼精疲労・視力低下などの頭部眼目の滋養不足症状，筋痙攣・筋のこわばり・四肢のしびれ・爪色不良などの筋肉の滋養不足症状，浅眠多夢などの心神滋養不足（心神不養[†]）症状などが出現する。

②**月経失調症状**：過少月経，ひどくなると無月経（閉経）などが出現する。

③**舌・脈**：淡白舌・薄白苔，細脈など。

治法：血（滋養分）を補う（**補血**）。四物湯が代表方剤だが，顔色不良・羸瘦・筋力低下など重い血虚には補肝湯*も使用される。全身の気虚を伴うものには芎帰調血飲なども使用される。またいわゆるこむら返り

図 1-15 肝血虚と肝陰虚の症状



(転筋[†])には芍薬甘草湯が使用される。また過多月経や崩漏[†]などには芎藭膠艾湯が使用される。不眠には酸棗仁湯が使用される。

肝陰虚

肝血虚がより重症となったもの。全身の滋養分がより低下し、そのために肝血虚症状が強まり、これに熱を帯びた熱証が加わった病態である。ここでの熱証とは、ほてり・のぼせなどの自覚症状だけではないことに注意が必要である。よく腎陰虚と合併する(肝腎陰虚証)。熱がより強まり上昇すると肝陽上亢証となる。

症状：肝血虚症状が強まり、さらに熱証が出現することが特徴となる。

①肝血虚症状：肝血虚により症状の程度はさらに強まる。

②陰虚内熱症状：四肢や顔面のほてり・顔面頰部の皮膚紅潮などの虚熱症状、熱が上昇したための耳鳴、皮膚乾燥・口燥感[†]などの滋陰不足症状、さらに陰虚内熱による盗汗[†]などが出現する。ほてりは夕方や夜間に出現、耳鳴は慢性的で蟬の鳴くような音、盗汗はほてりを伴うことがそれぞれ多い。